

小高賢の不在—本田一弘

・縁のうすき葬りをおえてポケットの死のあいさつの捨てられに
ける
・鳴き終わりすなわちそこは死ぬる場所簡潔なりき虫の一生は

『本所両国』
『本所両国』

青磁社から発行された小高賢のムツクが四月の初めに届いた。

【代表歌三〇〇首選】(日高堯子選)の中から「死」に纏わる歌を二首引いてみた。二月に急逝した小高賢は三十代で短歌を作り始めた頃から常に「死」を意識し、それを歌つてきた。二首ともに「死」の中にはかない「生」を見つめ、そうした歌を詠むことによつて「生」の有り様を考えていたことがわかる。

「震災関連死」という言葉がある。福島県では地震や津波の犠牲となり、命を落とした方が二千人を超えている。その一方で、原発事故のために多数の方々が避難所を転々とした後、故郷とは異なる土地で不如意な生活を余儀なくされている。避難生活の中で心身を病み、亡くなつてしまふ、これが「震災関連死」である。福島県内の市町村が震災関連死と認定した死者は五月二日現在で千六百九十九人。又、内閣府のまとめでは、震災と原発事故が原因とみられる福島県内の自殺者は昨年末現在で四十六人いるという。震災はまだ終わっていない。震災以降の「死」はすべて「震災関連死」と言えないだろうか。われわれは夥しい「震災関連死」

のなかに生きているのだ。
そうした現在の状況の中で、われわれはもつと「死」を意識して歌うべきなのではないか。「死」をどう歌うかは「詩」をどのように考えるかと等しい問題なのだから。また、「死」を歌うことは「生」を歌うこととも等しい。短歌とは生の根源的な問題を訴える詩形である。表現や韻律、文体といった要素も大事ではあるが、何を歌うのかがその歌人の存在意義そのものである。小高賢のように、現代という時代の中で「死」という主題を深く掘り下げて考え、歌うべきなのではないか。

近年の若手の作品をざつと見る限り、「死」を歌つている者の数は少ないと感じられる。自分や自分の身の周りの軽い出来事を何かこう言葉を捻くり回したような、口語ベースの舌足らずな表現で歌をこさえているような感じがしてならない。これは何も若干手に限つたことではないが。

小高には作品だけでなくその評論にも教えられることが多いかった。特に今年の角川短歌年鑑に書かれた「批評の不在」は意義深いダイイングメッセージである。その中の次のようない指摘にわれわれは叱咤激励される。

「批評には外部が必要だ。つまり、外側から対象を見直すという視線である。短歌だけではなく、他の文学と比べたらどうなるか。同じような問題が、戦前の歌壇ではなかつただろうか。」現在の歌壇は小高賢という存在を失つた。広い視点に立ちつつ短歌の本質を捉え、短歌を深く愛した彼の切実な最後の問いに作品、評論そして批評をもつてどう応えていくか。後に残されたわれわれが取り組まなければならない大きな課題の一つである。